

戦前期日本の医学界とノーベル⁽¹⁾生理学・医学賞 —推薦行動の分析を中心に—

岡本拓司

一、ノーベル賞受賞者推薦状の利用法

ノーベル財団は、一九七四年に規約を改訂し、授賞から五十年を経た賞に關しては、その選考資料（以後ノーベル賞文書と呼ぶ）を公開することを決定した。これ以降、科学史の分野では、自然科学関係の三賞に關する資料を用いた研究が発表されるようになった。研究の多くは、特定の年の賞の受賞者が決定する過程を主題としたものであり、現在に至るまでその傾向に特別の変化はないようと思われる⁽²⁾。二十世紀、特に第一次大戦以降にノーベル賞が獲得した威信の高さを考えると、受賞者決定の過程に科学史家の関心が集中するのも、まずは当然であると言えよう。

個々の受賞者の選考過程の研究が進むにつれ、次第に、受賞者の選考過程は、実際には半ば以上、スウェーデン科学史の領域に屬する主題であるという事情が明らかになつていった。受賞者選考の事情やスウェーデン科学史に詳しく述べる研究者は、不用意に、ノーベル賞文書に含まれる報告書類のみを用いた研究をもつて受賞者決定の過程を再現したと主張しがちである。しかし、スウェーデンやノルウェーの科学史家が、当時のスウェーデンの科学界

の状況の分析をもとに、あらためて報告書が書かれた意図や背景を調査すると、受賞者決定の過程に大きな影響を与えたスウェーデン固有の状況が存在し、それは報告書のみからは読み取れないといった事実が明らかになることが多い⁽³⁾。

ノーベル賞文書は、主として、候補者に関する様々な報告書の類と、選考に先立つて集められた推薦状からなる。このうち、受賞者決定の過程に関わるものは報告書類で、推薦状の影響力は小さい。もちろん、ノーベル賞委員など特定の人物による推薦が選考過程に影響を与えるといった傾向はあり、また、推薦を受けなければ候補者にはならない（ただし自薦は不可）が、受賞者決定の過程を左右するのは、推薦状の数や推薦者ではなく、ノーベル賞委員による候補者の業績の徹底した吟味と、委員会内部での議論である。従って、受賞者決定の過程が主題となる研究では、推薦状はそれほど注目されることはない。しかし、個々の授賞例の決定過程という比較的広がりの小さい話題にとらわれず、二十世紀の科学史全般を視野に入れた上でノーベル賞文書の史料としての価値を検討すれば、むしろ推薦状の方にこそ高い価値があると考えることも可能である。

ノーベル賞は高い威信を誇る賞とはいえ、所詮は賞である。個々の授賞が受賞者や受賞者の所属する機関に与える影響は大きい可能性があるが、科学の歴史全般に与える影響は限定されたものに過ぎない。しかも、その選考の過程はスウェーデンの科学界の動向という局所的な事情に左右されるところが大きい。これに対し、推薦状は、世界の科学者が誰のどの業績がノーベル賞に値すると考えるのかを、理由を付して述べた文書であり、二十世紀の科学研究の世界的な状況（といつてもヨーロッパ、アメリカが主体で、非西洋文化圏では、日本、中国、インドが関与する程度であるが）を知る手がかりを与える、他に例を見ない資料であることができる。

もちろん、受賞者選考の報告書同様、推薦状にも、推薦を行なった個人や機関の特殊事情が反映されているであろうことは言うまでもない。従って、たとえば個々の研究や研究者への評価の変遷を、推薦状を手がかりに知ろう

とする場合には、推薦者と被推薦者の関係などについて充分な注意が払わなければならない。また、ノーベル賞に対する世界の科学者たちの意識の変遷を検討しておくことも、推薦状の史料としての性格を考察するために必要である。発足した当初、ノーベル賞はもちろん今日の威信を獲得してはおらず、スウェーデンというヨーロッパの辺境の科学者たちが選考を行なう、賞金の額は大きいが知名度も権威もあり高くない賞であると考えられていた。ヨーロッパとアメリカから集められた推薦状の多くも、そのようなノーベル賞観を反映していたものと思われる。

一方、ノーベル賞文書中の推薦状の中に、推薦を行なった機関や個人に関する、通常の文書館などの調査では得られない情報を見出す可能性は極めて高い。その上で、さらに当該の機関や個人に関する史料を利用して、推薦が行われた背景や推薦がもっていた意味、その当時当該の機関や個人が置かれていた状況などを明らかにすることも可能であろう⁽⁴⁾。実際、特定の機関や個人についての文書を調査している過程で、ノーベル賞への推薦に関連する文書に出会うことは多い。また、そのような文書が、ノーベル賞への推薦がその機関や個人に対して重大な意味をもっていたという事情を伝えることも多い。そこで得られた知見を、更に進んでノーベル賞文書の全体を検討した結果と照らし合わせれば、より広い文脈での事態の把握が可能になるであろう。

本稿は、上で述べたような試みの一例を報告し、あわせて、ノーベル賞への推薦の実態を物語る史料を紹介しようとするものである。具体的には、一九二五年の東京帝大医学部による山極勝三郎の推薦と、一九三五年度の生理学・医学賞に関して、慶應義塾大学医学部と東京帝国大学医学部がそれぞれ別個に行なった推薦を取り上げ、それらを日本の医学界と生理学・医学賞との関わり（具体的には推薦・被推薦を通したもの）の歴史の中に位置づけた上で、これらの推薦が戦前の日本の医学史に関して物語るものを明らかにすることとしたい⁽⁵⁾。また、大学医学部の動きを注視しながら、ノーベル賞受賞者を日本人から出そうとすべく独自に活動を行なっていた外務省の動向にも注目する。ただし、戦前期全般についての包括的な議論は別稿に譲り⁽⁶⁾、本稿ではこの課題の輪郭を素描す

ることと、関連する史料を紹介することに重点をおきたい。

なお、具体的な議論に入る前に、本稿で扱う時期のノーベル生理学・医学賞の選考過程を紹介し、同時にノーベル賞文書の性格を検討しておく。

ノーベル生理学・医学賞の授賞機関は、ストックホルムのカロリنسカ研究所であり、選考の実務の大半を担うのは、同研究所の医学関連部門の現職の教授たちが選出したノーベル生理学・医学賞委員である（ただし委員はカロリスカ研究所に所属していない場合もある）。本稿が扱う時期においては、生理学・医学賞委員会は、三年任期の二名の委員と、毎年受賞者の選考が始まる時期に選出されその年の末までが任期の一一名の委員から構成されていたが、一九三四年からは後者の数が更に増やされている。また、この委員会には書記が一名つけられる。

受賞者の選考は、生理学・医学委員会が、候補の推薦依頼を、授賞年の前年の九月に世界中に送ることから始まる（締切は次の年の一月末）。ノーベル生理学・医学賞の候補を推薦する資格は、以下の人々に与えられている。

- (一) カロリスカ研究所の教授職にあるもの
- (二) スウェーデン王立科学アカデミーの医学部会に属する会員
- (三) 過去の生理学・医学賞受賞者
- (四) ウプサラ大学・ルンド大学・オスロ大学・コペンハーゲン大学・ヘルシンキ大学の医学部の教授会構成員
- (五) (四) で指定された以外の大学の医学部の教授会構成員（毎年最低六件）
- (六) その他の科学者

このうち、(一) から (四) までに属する人々は終身資格を有し、(五)、(六) としてどの機関や研究者が選ばれるかは、年ごとに検討される。(五)、(六) の範疇からの推薦は重視されており、科学者名鑑などを用いた網羅的な調査に基づいて、毎年、スカンジナビア半島外の、総計二十から三十の医学部に依頼状が送られる。大学とは関

わりのない機関などへの推薦依頼もあるため、終身資格を有する人々も含めると、毎年五百名から千百名の人々が推薦依頼を受けることとなる。医学部からの推薦状は、教授会の構成員の多くが別個に書くことも多いので、実際に送られる推薦状のうち、終身資格をもつ人々からのものは、推薦全体の一割から二割にとどまる。

実際に送られる推薦状の数は、少ない年で三十程度であるが、百を越える年も珍しくない。また、毎年の候補者の数は、五十名から七十名である。

自己推薦など、無効とみなされる推薦もあるが、一通でも有効な推薦状に基づく推薦を受けた者は、全てその年のノーベル賞候補となる。生理学・医学賞委員会では、集められた推薦状に基づいて候補者を挙げ、まず彼らを六つのグループに分類する（解剖学・組織、生物学一般・生理学・生理化学、病理学、内科・外科・眼科、細菌学・衛生・病因論、免疫学）。その上で、候補者の業績が簡単に調べられる。詳細な調査が必要であると見なされた候補者については、別に報告書が作成される。この報告書は、一九三〇年代に入ったころから、初めて推薦を受けたものすべてに関して作成されるようになった。報告書の執筆者は、必ずしも生理学・医学賞委員とは限らず、カロリンスカ研究所の構成員で当該分野の専門家であるものが多いが、場合によっては全くの部外者であることもある。

委員会での選考は二段階で行なわれる。第一段階では、新たな候補者や既に候補となつたことのある者の新しい業績に関する議論が行なわれる。第二段階では、第一段階で選ばれた候補と、それ以外の有力候補の業績が検討され、委員会が最終的に誰を受賞者として推薦するかが決定される。この結果の報告書はカロリンスカ研究所の教授会に送られ、そこでの審議を経たあと、教授会の投票によって受賞者が決定される。なお、選考時に作成される報告書は、一九二六年以降、選考に二段階あることを反映して、段階別に二種に分けられている。

物理学賞・化学賞の場合、最終的な投票は科学アカデミーで行われるが、科学アカデミーの会員は物理学・化学の専門家でない者が大半であるため、各賞の委員会が出した結果は尊重され、アカデミーでの投票は儀式としての

意味しかもたないことがほとんどである。これに対し、カロリンスカ研究所の教授会構成員は、すべて生理学または医学、或いは両方の専門家であり、教授会でも候補者に関する激しい議論が行なわれるようである。その結果、生理学・医学賞委員会の出した結論が覆されることも少くない。さらに、そもそも委員会の内部で見解が割れ、その状況を反映した報告書が教授会に提出されることがある。このような場合には、委員会の報告書をみるだけでは、教授会での投票結果は予測し難い。

二、山極勝三郎非受賞の影響

日本の医学関係者のうち、ノーベル生理学・医学賞を受賞した者は、一〇〇一年末現在でまだ一名もない。利根川進は一九八七年度の受賞者となつたが、彼は日本の医学界には所属しておらず、その業績は国外で確立されたものであった。従って、受賞者に関する情報のみからノーベル賞と日本の医学界の関わりを論ずることはほぼ不可能である。しかし、推薦・被推薦に着目すれば、日本の医学界は、既に戦前期からノーベル賞に強い関心を示していたことが理解される。

ノーベル賞の授賞は一九〇一年から始まるが、表一に明らかな通り、日本の科学者は既にこの年の賞から生理学・医学賞との関わりを持ち始めている。一九〇一年の受賞者はベーリング (E. A. von Behring, 1854-1931) であつたが、ベーリングが血清療法に関する見解を発表した論文⁽⁷⁾の共同執筆者、北里柴三郎 (一八五一-一九三一) も、この年の賞に推薦されている。ベーリング・北里論文では、血清療法が成功しているのは、ベーリングが担当したジフテリアの例ではなく、北里が担当した破傷風の例であつたため、北里が一九〇一年の賞に推薦されていたことが知られる以前から、北里周辺の研究者の間では、北里の仕事もノーベル賞に値したはずであるとする議論があつた。実際にノーベル賞文書を調査することにより、ヨーロッパの研究者にも、北里的貢献をノーベル賞に値すると

考えた者があつたことが分かる。このときの推薦者ボケイは、他に、北里のペスト菌発見をも推薦理由に挙げている⁽⁸⁾。

ほかにも、表一からは、著名な野口英世に対する推薦の多くは外国人によるもので、日本からの推薦は少ないこと、特に東京帝大医学部からの野口への推薦は皆無であること、ビタミンの発見者の一人である鈴木梅太郎に対する推薦が一九一四年という早い時期に外国人からなされていること、その一方で、脚気の病因をめぐって鈴木を厳しく批判した東京帝大医学部は、ビタミンの発見者としてイギリスのホプキンズを推薦していることなど、幾つかの興味深い事実を見て取ることができる⁽⁹⁾。しかし、日本の医学界の推薦行動の推移という論点を検討の対象とすると、最も注目すべき出来事は、一九二五年の山極勝三郎への推薦と、一九三五年の慶應・東大による推薦の二つに絞ることが可能である。

表一からは、一九二〇年代以前の推薦は、全体として数は少ないが、日本人が推薦者、外国人が被推薦者となるものが多いこと、伝染病研究所の秦佐八郎を京都帝大や東京帝大の研究者が推薦していることが読み取れる。ところが、一九二五年の山極勝三郎への推薦以降、日本からの推薦はそのほとんどが日本人を候補者とするものとなり、また、一つの機関が、その機関に関連する一人の候補者に推薦状を集中させる傾向が顕著になっていく。さらに、諸帝大の医学部が結束して呉建（東京帝大出身で九州帝大教授・東京帝大教授を歴任）や佐々木隆興（東京帝大出身で一時期京都帝大教授を勤める）といった関連の強い候補者を推薦し、その一方で、東京帝大への移管と同時に伝染病研究所を辞職した人々を中心と設立された慶應医学部が、強く加藤元一を推薦しているという事実も見て取ることができる。以上のような傾向が頂点に達したのが、一九三五年の推薦状況であるといえる。

東大医学部と慶應医学部による一九三五年の推薦については、次章以降で詳述するので、本章では、一九二五年の山極への推薦をそれ以前およびそれ以後の日本の医学界からの推薦と比較し、山極への推薦（と山極が受賞しな

かつたこと)が日本の医学界、とくに東大医学部周辺の人々にとってどのような意味をもったのかを明らかにしたい。

山極勝三郎が一九二五年に東大医学部から推薦される以前には、日本人が日本人候補を推薦した例は、一九一二年・一九一三年の秦佐八郎（一八七三—一九三八）への推薦があるのみである。秦への推薦は、彼がエールリヒ（Paul Ehrlich, 1854-1915）の指導の下で行なった、梅毒の治療薬サルバルサンの発見を推薦理由とするものである。ほかにも、秦は一九一一年のノーベル化学賞にも推薦を受けている。しかし、エールリヒが既に一九〇八年にノーベル生理学・医学賞を受賞していたという事情などから、秦が有力な候補となることはなかった。秦を推薦した人々も、秦が受賞しなかったことについて何らかの見解を示した様子はない。

なお、京大や東大から伝染病研究所の秦への推薦状が出されている点は興味深い。伝染病研究所の東大への移管や、後でみる京大と慶應の論争などと比較すると、この時代の推薦行動には、機関同士の反目（当時はまだそれ自体があまり顕著ではなかつたが）の影響はほとんどなかつたことが分かる。

ほかに、山極以前の日本人の候補者としては、野口英世と、ワイル病の病原体を発見した井戸泰・稻田龍吉が挙げられるが、野口は日本の研究者というよりはロックフェラー研究所所属のアメリカの研究者として推薦されており、また井戸・稻田の推薦者もフランス人であるため、これらの推薦が日本の医学界の推薦行動について明らかにするものは少ない。ただし、野口への日本からの推薦が、野口との関係が良好であった京大医学部からのもののみである点は注目される。世界的な活躍を行なつた日本人医学者として抜群の名声を誇つた野口と、日本の医学界の中心と見なされていた東大医学部との関係はあまり良好でなかつた。象徴的な出来事を一つ挙げると、野口は医学博士号を京大から、理学博士号を東大から受け取つており、東大から医学博士号を受け取ることを、いわば露骨に避けたかたちとなつてゐる。

なお、一九一〇年代の野口の書簡には、「ノーベル賞金」に推薦されたことを故郷の人々に報告し、コッホやエールリヒといった過去の受賞者たちと自分が並び賞されていることを誇りながら、賞の性格を説明するものが幾つか含まれている⁽¹⁰⁾。当時の医学者たちが、著名な過去の受賞者の名簿を理由に、ノーベル賞に対する信頼を高めていった様子が理解される。

以上みた通り、山極以前の日本人候補への推薦は散発的なうえに個人的色彩が強く、推薦にかけた熱意も大きなものであつたようには見えない。しかし、一九二五年の山極勝三郎への推薦は、それらとは趣きを異にしている。この推薦では、医学部長の林春雄を含む四名の東大医学部教授とともに山極を推薦しているが、同一機関に所属する日本の研究者が、揃ってかつての同僚の一人（山極は一九二三年に退官し、翌年に名誉教授となつた）を推薦したという例は、一九二四年以前にはない。推薦者の四名は、それぞれ別個の手紙を認めているが、文章には似通つた点が多く、協議の上でこの推薦を行なつたことは間違いないものと思われる。また、実際に推薦状に署名をしたのは、林など四名であったが、後述の通り、推薦の事実は東大医学部の教授会構成員の多くが知っていたものと考えられる。

山極勝三郎（一八六二—一九三〇）の業績は、東大医学部に推薦状を書かせるのに充分な、世界的な意義を有するものであった。彼は、一九一五年、助手の市川厚一とともに、兎の耳に反復的にタールを塗ることによって、世界で初めて人工的に癌を作り出すことに成功した⁽¹¹⁾。当時、癌の原因については、ウイルヒョウ（Rudolf Ludwig Carl Virchow, 1821-1902）の反復刺激説が有力視されていたが、これを実験的に示すことは困難であった。欧米でも、化学薬品などを用いて実験動物に反復的な刺激を与え、癌を作り出そうと試みた実験はあったが、いずれも成功は見ず、山極・市川の実験は反復刺激説を直接的に証明するものとして、多くの研究者から賞賛された。ただし、当時、反復刺激説の実験的証明の第一号と見なされたのは、山極・市川の実験ではなかった。デンマークのフィビ

ゲル (Johannes Andreas Grib Fibiger, 1867-1928) が、一九二三年に、「コキブリを食べたネズミの胃の中で、コキブリを中間宿主とする寄生虫が成長し、癌を生じさせる」とことを発見しており、これが反復刺激説の最初の証拠であると考えられていたからである。山極・市川も、自分たちの実験の途中でフィビゲルの成功の情報を得ており、ドイツ語の論文に「フィビゲルの輝かしい結果に励まされ」 (Angeregt durch dieses glänzende Resultat von Fibiger) 実験を継続したと述べている⁽¹²⁾。

「反復刺激説の証明としてはフィビゲルの実験に遅れたと考えられたものの、山極・市川の業績は固有の意義を有していた。人工タール癌の成功以前には、研究用の癌の入手は困難であったが、山極・市川の実験によつて、人工的に研究用の癌を作ることが容易になつた。ただし、人工的に癌を得る方法としては、山極・市川のあとで、マウスを用いてより早く簡単に癌を作ることに成功した筒井秀次郎の方が、結果的には著名になつた⁽¹³⁾。

山極を一九二五年のノーベル生理学・医学賞に推薦した四人の東大医学部の教授たち、及び東大医学部の関係者は、一九二五年の推薦状がどのような結果を生むのか注視していたものと思われる。しかし、実際には、彼らの推薦状はそれほどの効果を發揮することなく、結局は山極はノーベル賞を受賞しなかつた。

戦前の日本人のノーベル賞候補の中でも、山極は、唯一、実際に受賞していくても何ら不思議ではない候補者であったと言える。東大からの推薦があつた年の翌年には、ドイツの著名な医師アショフ (Ludwig Aschoff, 1866-1942) が山極を推薦しており、それを受けた、ノーベル生理学・医学賞委員会は、山極を候補として検討し始めた。表一にある通り、カロリンスカ研究所のヘンシェン (Folke Henschén, ノーベル賞委員ではなかつた) は、山極に関して第一段階の選考で二通の報告書を提出しているが、一九二六年八月三日に提出された最初の報告書において、一九二六年度の生理学・医学賞受賞者として、山極とフィビゲルの両者を強く推している。

ヘンシェンの主張は、最終的には委員会の採用するところとはならなかつた。委員会はバクテリオファージの研

究を理由に、一九二六年の受賞者としてデレル (*Félix Hubert d'Herelle, 1873-1949*) をカロリنسカ研究所の教授会に推薦した。しかし、この推薦は教授会で否決され、一九二六年度の受賞者決定は翌年に持ち越されることとなつた。このような経緯が二年続いたためか（一九一五年にも同様の事態が生じていた）、委員会は一〇月にあらためて有力な候補者に関する報告書を集めた。ヘンシェンは、一〇月一六日に、山極とフィビゲルに関する報告書を再び提出したが、ここでは候補としてフィビゲルのみを推薦し、山極の名前は落としている。理由としては、フィビゲルの業績の方が早かつたこと、タールが癌を引き起こすという現象自体は既に十八世紀に知られていたことを挙げている。委員会が、より有力な候補に推薦を絞るよう要請した可能性も考えられる。

唯一山極を推薦していたヘンシェンが、報告書から山極の名前を落としたため、翌年に持ち越された一九二六年度の受賞者選考には山極の名は現れなかつた。選考の過程で山極の名前に議論が及ぶことはあつたが、山極自身が「フィビゲルに励まされて」と述べている事実が、フィビゲルの業績の意味を物語つていてと解釈された。そして、最終的に、委員会の議論と教授会の投票を経て決定した一九二六年度の受賞者は、前年に山極と共に名前の挙がっていたフィビゲルであつた。同種の業績で異なる年度の受賞者が選ばれるることは考えられないでの、一九二六年度の受賞者がフィビゲル一人であったことが伝わると、東大医学部およびその周辺の人々は、かつて東大からなされた推薦が、結局は実を結ばなかつたことを理解したものと思われる。さらに、一九三〇年には山極は死去したため、山極がノーベル賞を受賞する可能性は全くなくなつた。上の一連の出来事は、次に述べる通り、東大周辺の人々、及び日本の医学界全般のノーベル賞観に大きな影響を与えていたものと考えられる。

本稿でも後に紹介する呉建は、自分の業績がノーベル賞に値するものと考え、同僚に相談していたようである。おそらく一九三五年ころのことであろうが、これに対して、山極と同じ病理学教室の緒方知三郎は、次のように述べたという。「曾て当然ノーベル賞を受けらる可きものであると我々が考へた山極先生の人工癌の研究を日本人で

あるという点からであらうが、知らぬ顔をして横を向いてた委員連が、どうしても同じ日本人である君〔呉建〕を選ぶ筈がないと、その断念す可きをすゝめた」⁽¹⁴⁾。この回想からは、山極への推薦が東大の関係者には知られていたであろうこと、そしてこの推薦が実を結ばなかつた理由が、日本人への差別であると考えられていたことが窺われる。

山極の業績を論じた文章のうち、ノーベル生理学・医学賞委員会の中に日本人や東洋人への差別意識があり、それが山極への受賞を妨げたとするものは多い。そして、フィビゲルの受賞後から囁かれていた、彼の寄生虫癌の業績は誤りであったとする噂が、実際に証明された一九五二年⁽¹⁵⁾以降には、山極がノーベル賞を逃した経緯についての伝説は、次のような形態をとるようになつていった。「当時ノーベル賞委員であったヘンシェンは、フィビゲルの研究よりも山極のものの方が優れていたことを委員会での議論上強く主張したが、日本人・東洋人への授賞はまだ早いとする他の委員に押し切られ、フィビゲルへの授賞が決定した」。

当時の様子を知りたいと願つた東大を中心とする医学関係者たちは、ヘンシェンの来日講演を実現させることにも成功している。講演は一九六六年一〇月二十四日に行われ、その原稿は後に公表された⁽¹⁶⁾。ヘンシェンは、自分は報告書を提出したが、その中ではフィビゲルと山極の二人を推薦した、現在では両名が揃つて受賞すべきであると考えている、とのみ述べ、日本で流布していた伝説を裏書きする内容も、また彼自身が山極の名前を候補から外したという事実も、一切語っていない。実際、ヘンシェンは委員ではなかつたので、委員会での議論について語るべき内容は持ちあわせていなかつたはずである。

ヘンシェンの講演は、しかし、ノーベル賞委員会日本人差別説を覆すことはなかつた。当夜の講演を聞いた高山昭三（元国立がんセンター研究所長）は、講演から三十二年後に、ヘンシェンはノーベル賞委員会日本人差別説（回想では日本人ではなく東洋人であるが）を述べたと回想している⁽¹⁷⁾。ヘンシェンがそのようなことを講演で述べ

べたとはまず考えられない。この回想は、ヘンシェンの講演の内容などにはほとんど関わりなく、日本の医学界では、山極の受賞の可能性がなくなつてから遙か後に至るまで、ノーベル賞委員会日本人差別説が強く信じつづけられていたことを示すものであると言える。

本稿が考察する戦前期には、フィビゲルの業績に対する評価はまだ確定的ではなかつたが、山極の非受賞が決定した一九三〇年前後からは、日本の医学界では、ノーベル賞の選考は必ずしも公正なものではなく、特に日本人（東洋人）に対しては人種的な差別があると考えられるようになつたと思われる。山極の非受賞によつてこのようなノーベル賞観が表面化した背後には、日本が西欧から科学を導入してきたという事実そのものに起因する科学観・文化観・西欧観の特徴があると考えられるが、この課題の検討は別の機会に譲り、ここでは以上のようないくつかのノーベル賞観が、山極後のノーベル賞への推薦行動にどのような影響をもたらしたかを考察しよう。

表一に見る通り、山極への推薦の後、特定の機関が特定の個人を推薦する形態が目立つようになり、一見したところ、ノーベル賞への推薦はより活発になつたように思われる。これは、山極の例を通じて、日本の医学界が、優れた業績であつても目立つた推薦を行なわなければ正当な評価を受けることがないと学習したために生じた傾向であると考えられる。学習の成果を応用すれば、山極ほどの業績でなくとも、活発な推薦活動を行なえば受賞がうるかもしれないという結論も導かれる。選考が公正でない賞であれば、受賞しても仕方がないと考える人々も少なからずいたものとは思われるが、そのような判断は表面化しにくい。史料から窺いるのは、賞そのものの公正さは疑いながらも、推薦行動には熱心になるという一見矛盾した態度である。

前に紹介した緒方知三郎の呉建への追悼文の既引用箇所の後には、次のような文章が続く。「今年（一九四〇年）は又久しぶりにノーベル賞の推薦をせよとの依頼状が私のところに迷ひ込むで来てゐる。それは単なる形式的の推薦依頼に過ぎないことはわかり切つてゐるので、返事もせずにその儘に机上に放つてある」。ノーベル賞の選考は

公正でなく、また、推薦依頼は日本にもやってくるがそれは単なる形式的な依頼に過ぎないと考えられていたようである。しかし、こう書いた緒方知三郎は、一九三五年には呉建への推薦状に署名をし、また一九四一年の賞に対して佐々木隆興を推薦してもらいる。受賞者選考の公正さへの疑念と、推薦行動の熱心さは、受賞した場合に得るもののか大きさ次第では矛盾しない。緒方の文章と行動は、一九三〇年代には、ノーベル賞のもたらす栄誉が、極めて大きいものであると意識されていたという事実を物語っているといえる。また、賞への疑念が保持される限り、日本から受賞者がでない場合には、常に、受賞者選考が公正でないという理由を言いたてることが可能である。

山極への推薦とその失敗以降、日本から送られるノーベル生理学・医学賞への推薦は、委員会の判断を信頼する個人の推薦から、委員会の公正さへの或る程度の疑問に基づく機関ごとの推薦へと変化していく。実はこのような傾向は、欧米からの推薦では、ノーベル賞の地位が認められ始める一九一〇年代からすでに顕著に見られる。科学研究の世界への登場が遅れた日本は、それだけ科学研究の評価の客觀性への信頼が強く、現実の科学者の世界を支配する力学に疎かった、つまり、欧米に比べて「うぶ」であったと言えるのかも知れない。

一九二〇年代後半からは、しかし、日本の医学界からの推薦は急速に活発化し、ノーベル賞への推薦状の送付が、国内の学界政治の状況の輸出を意味するかのように見られる状況さえ生れていく。この事態をもつともよく表しているのが一九三五年の推薦状況であろう。次章以下では、世界的な権威による評価を求めて争う諸研究機関の姿を、より具体的に見ていくこととする。

表一・日本人の関連したノーベル生理学・医学賞への推薦、一九〇一年—一九五〇年

| 年 | 被推薦者 | 推薦者 |
|------|--------------------------|----------------------------|
| 一九〇一 | 北里柴三郎（伝染病研究所） | A. de Bokay (アダペスト) |
| 一九〇七 | Theodor Kocher (ベルン) | 伊藤隼三 (九大医) |
| 一九一〇 | August Bier (ベルリン) | 伊藤隼三 (九大医) |
| 一九一二 | Jules Bordet (パリ・ラッセ) | 平井毓太郎 (九大医) |
| 一九一三 | 秦佐八郎 (伝染病研究所) | 伊藤隼三 (九大医) |
| 一九一四 | 秦佐八郎 (伝染病研究所) | 大沢岳太郎 (九大医) |
| 一九一五 | 野口英世 (ロックフェラー研) | Alfred Lendon (アーネスト) |
| 一九一九 | 野口英世 (ロックフェラー研) | 伊藤隼三等(九大医より三名) |
| 一九二〇 | 鈴木梅太郎 (東大農) | W. A. Oppel (ペテルスブルク) |
| 一九二一 | 野口英世 (ロックフェラー研) | Wolfgang Heubner (ゲッティンゲン) |
| 一九二二 | 井戸 泰 (九大医) | Alexis Carrel (ペリ) 等二名 |
| 一九二三 | 稻田龍吉 (東大医) | L. Martin (ペリ) |
| 一九二四 | 野口英世 (ロックフェラー研) | L. Martin |
| 一九二五 | 野口英世 (ロックフェラー研) | A. Carrel (ペリ) 等二名 |
| 一九二六 | 山極勝三郎 (東大名誉教授) | H. G. Wells (シカゴ) 等二名 |
| | F. d. Hérelle (アンクサンヌリエ) | 栗保三郎 (九大医) |
| | | E. Hoffmann (ボン) |
| | | A. Carrel (パリ) 等八名 |
| | | 林春雄等(九大医より四名) |
| | | 野口英世 (ロックフェラー研) |

Leonor Michaelis (歴史医大)

野口英世 (ロックワルター研)

F. Sauerbruch (フーザウブルク)

山極勝三郎 (東大名誉教授)

野口英世 (ロックワルター研)

K. Spiro (ケーリー・スパイロ)

A. Carrel (アーノード・カール) 等11名

川村 達 (九大医)

L. Aschoff (ライブルク)

松本信一 (京大医)

[九] [八]

F. Hopkins (エラムズ)

加藤元一 (慶應医)

山極勝三郎 (東大名誉教授)

[九] [一]

吳建 (東大医)

[九] [三]

吳建 (東大医)

[九] [五]

加藤元一 (慶應医)

加藤元一

[九] [六]

佐々木隆興 (杏雲堂病院)

Erich Hoffmann (エリック)

[九] [六]

市川厚一 (北大農)

久野 寧 (満州医大)

吳建 (東大医)

佐々木隆興 (杏雲堂病院)

山極勝三郎 (故人)

加藤元一 (慶應医)

吳建 (東大医)

林春雄等東大医より11名

秦佐八郎等慶應医より14名

A. Maximow (アカモ)

板垣政参 (九大医)

木村男也等東北大医より1名

宮島幹之助等慶應医より11名

I. P. Pavlov (イーベル賞受賞者)

石原忍等東大医より10名

I. P. Pavlov

橋田邦彦等東大医より1名

松本信一 (京大医)

木村 廉 (京大医)

正路倫之助 (京大医)

岡林秀一 (京大医)

村廉等京大医より1名

木村 廉 (京大医)

M. R. Caster (マヌスアイレス)

板垣政参 (九大医)

| 一九二八 E. C. Kendall (エーネアポリス) 挿間文一 (京城医專) 久野 審 (名大医) 石原 誠 (九大医) 吴建 (東大医) | 小野寺直助 (九大医) 田代四郎助 (シンシナッティ) A. Bethe (ハタンクヘルト) 佐山光章 (満州医大) 緒方大象 (長崎医大) 影浦尚視 (長崎医大) | |
|--|---|---------------|
| 一九三一 佐々木隆興 (杏雲堂病院) 鳥鶴隆三 (京大医) 佐々木隆興 (杏雲堂病院) | 角尾晋等長崎医大より三名 古屋野宏平 (長崎医大) 緒方知三郎等東大医より七名 | |
| 一九三四 佐々木隆興 (杏雲堂病院) | | |
| 一九三九 出典 : Nobelarkiv, Karolinska Institutet, Stockholm. | | |
| <p>表一・ノーベル生理学・医学賞受賞者選考の報告書に名前が現れた日本人、一九〇一年—一九五〇年</p> | | |
| 年 | 執筆者 | 執筆者 |
| 一九〇一 | E. Almquist | — |
| 一九一四 | C. Sundberg | — |
| 一九一五 | C. Sundberg | — |
| 一九一五 | G. Hedrén | — |
| 一九一六 | F. Henschen | 山極勝三郎 |
| 一九一六 | J. Sjögqvist | 山極勝三郎 |
| 一九一六 | L. Michaelis | H. Bergstrand |

山極勝二郎

Henschen

一九二八

加藤元一

H. Gertz

一九三一

吳建

H. Gertz

吳建

吳建

H. C. Jacobaeus

一九三三

吳建

N. Antoni

H. Gertz

一九三三

吳建

G. Häggqvist

一九三五

佐々木隆興

F. Henschen

加藤元一

H. Gertz

一九三六

市川厚一

F. Henschen

加藤元一

H. Gertz

一九三七

佐々木隆興

F. Henschen

加藤元一

H. Gertz

一九三八

山極勝二郎

F. Henschen

加藤元一

H. Gertz

一九三八

久野寧

F. Henschen

加藤元一

H. Gertz

一九三九

挟間文一

F. Henschen

加藤元一

H. Gertz

一九三九

久野寧

F. Henschen

加藤元一

H. Gertz

一九三九

石原誠

F. Henschen

加藤元一

H. Gertz

一九三九

鳥鴻隆二

F. Henschen

加藤元一

H. Gertz

出典：表一に同じ。

三、加藤元一の神経伝導研究

表一からわかる通り、加藤元一は一九二八年と一九三五年の二回にわたって、自分も所属した慶應義塾大学医学部からノーベル生理学・医学賞に推薦されている。慶應からの推薦では加藤の名前のみが挙げられており、また逆に、慶應以外の日本の研究機関から加藤が推薦された年はない。加藤と慶應、及び慶應以外の諸大学の医学部との関係を理解するためには、慶應に医学部が設立される経緯にまで溯って考察を行なう必要がある。

慶應義塾の創設者、福沢諭吉には、早い時期から医学科設立の計画があつたが、これが実現したのは、福沢没後の一九一七年になつてからのことであった。医学科設立には、直前に起つた伝染病研究所移管問題が大きく関与している。

伝染病研究所は、ドイツ留学中にコッホの下で大きな業績を挙げた北里柴三郎を迎えるために設立された。北里は、東京大学医学部での成績があまり芳しくなく（卒業時は十六番中八番）、留学ののち母校で教鞭を執るという途を歩むことができなかつたため、大学卒業前に内務省の雇となり、後に内務省から派遣されてドイツに留学している。ドイツ留学中、北里は、後に帝大の教授となる緒方正規の脚気菌発見を批判する論文を発表しており、また、自らの業績を誇つてか、学会参加などのためにドイツを訪れる日本人の同僚に対し、傲岸とも見える態度をとるようになつていた。一八九一年には、コッホの開発したツベルクリンについて学ぶため、帝大医科大学から三名（うち一名は助教授であった山極勝三郎）の研究者が訪独したが、彼らに対しても北里の態度は冷たかっただようである。既にコッホの下には自分がいるという意識もあつたものと考えられる。

北里は、帰国時にはすでに有名人であつたが、帝大医科大学との関係があまりよくなかったこともあり、帰国後の所属は容易に決まらなかつた。最終的には、福沢諭吉が自分の借りていた土地に建てた家屋を提供し、大日本私

立衛生会が資金を支出して（これに民間からの寄付も加わった）、一八九二年十一月に伝染病研究所が設立され、北里はその所長となつた。その後、一八九九年には伝染病研究所は内務省所管の国立研究所となつた。

一方、政府部内には、行財政整理のために研究所を文部省や大学の管轄下へ移そうという計画があつたが、これが一九一四年に実現し、伝染病研究所は文部省・東大へ移管されることとなつた⁽¹⁸⁾。しかし、上述の経緯で伝染病研究所所長となつた北里はこれを嫌い、北里を慕う技師たちとともに連袂辞職し、新たに北里研究所を設立してそこへ移つた。

ちょうどそのころ、慶應義塾では、創立六十年を記念して理工科・医科の設立が計画されていたが、既に故人となつていた福沢との関係もあり、また、伝染病研究所を辞職していたこともあって、医科の設立は北里と旧伝染病研究所の技師たちの協力の下に進んでいった。こうして、新設の医学科の教員の多くには、伝染病研究所の出身者たちが就いた。また、北里と親交の深かつた京都帝大総長の荒木寅三郎の尽力で、京大からも多くの研究者が教員として就職した。ほかにも東大・九大や各地の医科大学の出身者が教員となつたが、本稿で論ずる加藤元一（一八九〇—一九七九）は、一九一八年に京大医学部から慶應義塾にやってきた⁽¹⁹⁾。この後、一九二〇年になつて、医学部の開学式と病院の開院式が行なわれている。

加藤は京大医学部の石川日出鶴丸（一八七八—一九四七）の下で神經生理学を研究しており、慶應着任後しばらくは鳥類の白米病（脚気）の研究を行なつてゐた。一九一二年夏、加藤は約一年の欧米視察の旅に出発したが、その時、生理学教室の助手であった牧亮吉に、麻酔をかけた部位における神經伝導の減衰の形態を決定するという課題を与えた。当時、麻酔部位においては神經伝導は次第に減衰していくとするフェアヴァォルン（Max Verworn, 1863-1921）の説が広く受け入れられており、その減衰の形がどのようなものであるかが論争的となつてゐた。日本には大きな墓が生息しており、その十センチメートルあまりの坐骨神經を用いれば、欧米では行ない得ない実

験が可能である。加藤はこの点に着目して牧に実験を命じたのであった²⁰⁾。

帰国後、牧は加藤に実験の失敗を告げたが、加藤は牧の得た結果を検討し、神経伝導の大きさは、麻酔部位において小さくなるものの、フェアヴォルンの説のように減衰することはないと考えるようになつた。この結果は、一九二三年、第一回日本生理学会の席上で発表された。

第二回日本生理学会には、京大時代の加藤の師、石川も出席しており、加藤はヨーロッパの学者の定説を覆す発見を師も喜ぶであろうと期待して発表を行なつた。ところが、石川は、加藤の不減衰説を幼稚な学説であると批判し、二時間もあればこれを粉碎してみせるとして、壇上の加藤を問い合わせた。加藤は一言もなく立ち往生し、返答できなまま席に戻つたという。同日、加藤らが欠席した会議では、石川が加藤ら慶應の研究者を生理学会から除名しようと提案したともいわれる。石川は、かつてフェアヴォルンの下で学んでおり、自分の学生であった者が自分の師の学説に異を唱えることに強い反感を覚えたものと思われる。

不減衰説に対する石川の強い反論には、東大の橋田邦彦らも一時は賛意を示した様子であり、加藤らは国内で不減衰説を主張することは不可能であると考えるようになつた。国内の学界が未成熟で、実験的証拠に基づく議論が不明確な理由に基づいて拒否される場合、多くの研究者は、より成熟度の高い国外の学界に訴えかけるのが通常である。加藤らもこの路線をとることとし、厳密な実験結果に基づく学説を次々に英文で発表し、国外の著名な研究者に送付した²¹⁾。また、国際生理学会の第十二回（一九二六年、ストックホルム）、第十三回（一九二九年、ボストン）、第十四回（一九三一年、ローマ）、第十五回（一九三五年、レニングラートとモスクワ）で、研究成果の発表や演示実験を行ない、研究成果を国外の研究者たちに認めさせることに成功した。この間、一九三〇年初頭には、助手の金谷俊郎が単一筋繊維を生きたまま摘出することに成功し、また、同年初夏には助手の清水忠夫が単一神經繊維の同様の摘出に成功した。いずれも世界初の成功例で、これにより慶應の生理学教室は、世界の神經生理学研

究の先端をいく学説と技術を保持することとなつた。慶應医学部では、学部を挙げて、財政面などで生理学教室を支えた。

国外での不滅衰説の成功にも関わらず、国内では、加藤らの学説は容易に受け入れられなかつた。京大の生理学教室は反不滅衰説の一大拠点であったが、その他に橋田邦彦ら東大生理学教室も独自の見解を発表していた。さらには、京大の石川の下で加藤とともに学んだ人々が、東京慈恵会医大や京城帝大医学部などの生理学教室で次々に新たな結果を発表し、それらの解釈をめぐって多くの論争が発生している。また、この過程で、一九二七年には、加藤の学士院賞受賞に関して、石川が疑義を投げかける公開質問状を提出するといった、半ば感情的な対立も生ずるに至つた(22)。

慶應医学部が学部を挙げて加藤をノーベル生理学・医学賞に推薦し、帝国大学系のその他の医学部は加藤の業績を無視するという状況は、以上のような、慶應・東大・京大の関係がもたらしたものと考えられる。一九三五年までは、加藤の研究結果は、既に広く国外で認められるところとなつていていたが、国内での論争は依然として決着を見ていなかつた。師弟関係や大学間の反目が関係するため、国内の論争相手を説得する方が、国外の研究者を説得するよりも困難であつた。しかし、加藤がノーベル賞を受賞すれば、さすがに石川も学士院賞の場合のような公開質問状を送ることはできなかつたであろう。なお、一九二八年から始まる慶應への推薦依頼は、加藤の国外での活動が認められた結果行われた可能性が高い。

四、一九三五年の推薦・背景と諸機関の動き

一九三五年のノーベル生理学・医学賞には、上述の加藤と、東大の呉建、杏雲堂病院の佐々木隆興が推薦を受けている。加藤以外の二人について、業績などを見ておくことにする。

呉建（一八八三—一九四〇）⁽²³⁾は、有名な医師の一家、呉家の出身で、東京帝大医科大学を卒業した後、ヨーロッパへの留学を経て東大の内科学の助教授となり、次いで一九二〇年には福岡医科大学（後に九州帝大医学部）教授として福岡に着任した。一九二五年には再び教授として東大に戻り、入沢内科を引き継いで呉内科を創設した。業績は、随意筋の運動神経による支配の発見、進行性筋萎縮症の研究⁽²⁴⁾、脊髄副交感神経の発見、心臓病の研究など多岐にわたっている。呉は、自身の業績に自信があり、既に述べた通りノーベル賞受賞を実現させようとして同僚に相談をもちかけている。表一には呉への推薦が幾つか見られるが、多くは呉と同僚であつたり師弟関係にあつたりした人々からのものである。また、呉への推薦状に添付された業績の説明書を見ると、多くの推薦状で共通した記述が見られることから、複数の機関において、協議の上で呉への推薦が行わっていたことが窺われる。

佐々木隆興（一八七八—一九六六）⁽²⁵⁾は、医師の家として著名な佐々木家に養子として入り、東大医学部で医学を学んだ。ドイツへの私費留学の後、一時期乞われて京大医学部教授として教鞭を執ったほかは、養家の杏雲堂病院での医療活動と、そこに設けられた佐々木研究所での研究に従事した。佐々木の業績は、細菌による硫化水素発生の研究（一九一三年、伝染病研究所浅川賞受賞）、アミノ酸の細菌による分解とアミノ酸合成の研究（一九二四年、帝国学士院恩賜賞受賞）などがあるが、最も顕著であったのは、佐々木の下で吉田富三によって行われた癌研究、特に一九三二年にオルト・アミノアツォトルオールを経口的にラットに与えて、人工肝癌の発生に成功したことであろう（発表は一九三四四年）。これは、世界で初めて、化学構造の知られている物質によって内臓に癌を発生させるのに成功した例であった。この業績はほとんど吉田一人によるものであったが、佐々木をノーベル賞に推薦した者は、人工肝癌発生を推薦理由に挙げている。佐々木の場合も、推薦者の多くは師弟関係にあつた者か、出身大学の東京帝大の関係者であった。

さて、一九三五年の加藤と吳への推薦で見逃せないのは、兩人がともにパヴロフ (Ivan P. Pavlov, 1849-1936) によつても推薦されている点である。パヴロフがなぜこの二名を推薦したのかは明らかではないが、一九三五年に、レニングラードとモスクワで国際生理学会が開催されたことに関連があるものと考えられる。单一神経纖維の摘出に成功した加藤ら慶應の研究者たちは、この回の会頭であったパヴロフによつて国賓として学会に招待され、演示実験を行なうことが求められていた。加藤にはソビエト連邦での旅行について苦い記憶⁽²⁸⁾があつたため、返事をしばらく留保していたが、研究室の若手研究員たちが国賓としての招待に魅力を感じていたことや、ソビエト連邦政府が実験の成功のために最大限の努力を行なうと約束したことなどから、最終的には招待を受けることとなつた。

以上の経緯から、パヴロフが加藤の研究をよく知っていたことは明らかである。また、加藤らの参加を促すことを目的に、加藤および同じ日本人の研究者である吳をノーベル賞にノーベル賞に推薦した可能性もある。実際、加藤は、ソビエト連邦滞在中に、パヴロフの弟子たちから、パヴロフが自分をノーベル賞に推薦したことを知らされている。パヴロフが二名の日本人を推薦している同じ年に、この二名の日本人の所属する研究機関が機関を挙げて推薦を行なっていることから考えると、パヴロフによる推薦は、慶應と東大の知るところとなつていった可能性も高いと思われる。パヴロフの働きかけによつて、ノーベル賞委員会が慶應を東大に推薦を依頼したとも考えられる。

慶應医学部の推薦状の写しを史料三で紹介した。ノーベル賞文書中には、この手紙に唐沢光徳による署名の入つたものが保管されているが、史料二でも触れられている通り、慶應では教授会で一致して加藤を推薦している。

パヴロフの推薦があつた一九三五年は、加藤の受賞の可能性は極めて高いと考えられたようである。史料一にあらねども、慶應医学部教授で、衆議院議員を務めた経験もある宮島幹之助は、推薦状送付の前後に外務省欧亜局長の東郷茂徳を訪問し、ストックホルム駐箚公使などを通じた関係機関へのはたらきかけを要請している。ただし、通常のノーベル賞選考の様子から考えて、日本人への授賞を実現させるために公使が行なうことはほとんどなかつ

たと考えてよいであろう。当時の公使は、科学にも多少の関心をもっていた白鳥敏夫⁽²⁷⁾であったが、要請を受けても対処に困惑したのではないかと思われる。

一方、東大医学部は、推薦以外には、呉の受賞に向けた動きを特に見せることはなかった。表一を見る通り、東大医学部から推薦されたのは呉と佐々木の2名であり、慶應医学部のように教授会全体で一人を推薦していたわけではなかつたため、宮島のような行動はとり難かったものと考えられる。佐々木を推薦した二名のうちの一人は、佐々木の友人であり、また、加藤の業績をよく知る立場にあつた、生理学の橋田邦彦であった。

史料四は、依頼をうけた外務省が興味深い情報を得ていたことを物語ついている。この文書は、慶應と東大で別個に推薦状を送るのではなく、両者協議の上、一致して候補者（一名に絞るのか複数名を推薦するのかは明らかではない）を推薦できるよう運動を試みた者があつたが、意図は達成できなかつたことを伝えている。一致した推薦が実現しなかつた理由は、東大内部でも候補者を一本化するのに失敗していることや、伝染病研究所以来の東大と慶應の関係（一九三五年前後には、国立公衆衛生院の院長の人選をめぐる問題が生じていた）などであつたと考えられる。なお、両大学の医学部の関係を考えれば、両者が合同した推薦を模索することの難しさは容易に想像ができるが、それでもなお推薦の一一致に向けた動きがあつたのは、パヴロフが呉・加藤の両名を推薦していることが知られており、一九三五年に日本人が受賞する可能性が高いと考えられたためではないかと思われる。

史料四是、また、外務省が日本に送られたノーベル賞への推薦依頼に関して情報を得ていたことを伝えている。宮島など大学の医学関係者が、一九三五年の動きに関連して外務省に情報を提供したものと思われる。外務省が日本人の受賞に向けて行なうことはそれほど多くはなかつたと考えられるが、省としては日本人受賞者の誕生を望み、努力の方途を模索していたようである。

なお、一九三五年のノーベル賞への推薦に関連したことと考えられるが、同年から、ノーベル賞に対する国全

体の意識を高めようとする動きが活発化している。戦前期の一般向け科学誌として比較的高い発行部数を誇った『科学知識』では、一九三五年から過去のノーベル賞受賞者の紹介を連載し始めるなどして、ノーベル賞に関する知識の普及に努めている。また、同誌は、各界の著名人に対しても、日本人では誰がノーベル賞受賞者にふさわしいかを問うたアンケートを実施し、その結果を一一月号、一二月号に公表している⁽²⁸⁾。

五、ノーベル賞への推薦による競争

ノーベル賞の受賞者は、年間十名程度と少ないためか、我々は或る程度まとまった情報を与える国別の受賞者数を問題にしがちである。しかし、候補者を推薦する人々の行動を観察する限りでは、国に対する意識はそれほど強くないようと思われる。

戦前期の日本には、ノーベル賞の受賞者は一人も存在しなかつたが、生理学・医学賞への推薦状を見る限り、日本人から受賞者を出そうという意識は感じられない。推薦者たちの関心は、より局所的なものであつたようと思われる。つまり、彼らは、自分たちの所属する機関やその周辺から受賞者を出すことには大きな意義を見出しているが、日本人であっても競合する機関から受賞者が出ることにはほとんど関心がないか、或いは多くの場合反発さえ覚えたようである。所属機関に関わりのない推薦は一九二〇年ころまでに終わり、山極勝三郎への推薦以降は、機関ごとの推薦が主流となっていく。一九三五年には、日本人から受賞者を出すことに意義を認めた外務省がそれなりの努力をしたようであるが、実際に推薦を行なう個々の研究機関に所属する研究者たちがこの意識を共有することはなかつた。

なお、こうした傾向は、欧米諸国からの推薦ではごく早い時期から普通に観察される。アメリカなど競合機関が多い国では、機関間の競争は日本の場合よりも遙かに激しい。日本の場合には、優れた研究であれば、自然とその

意義は認められるという素朴な意識が否定される出来事（具体的には山極勝三郎の非受賞）を経て、国際的な科学者社会における科学的研究への評価のあり方（より具体的にはノーベル賞委員会による選考）への疑念が生じ始めるとともに、投票と見紛うばかりの推薦行動が登場することとなる。

ノーベル賞は、平和賞の場合を除いて、個人に与えられるのが普通である。原則として、推薦状は個人の名前を挙げるべきもので、被推薦者の所属する国や機関を賞賛するためのものではない。機関ごとに一人の候補を推薦するのが慣例となっている場合でも、一つの研究機関に複数の有力なノーベル賞候補が存在すれば、機関として一致した推薦を行なうことは困難であろう。複数名を同一の推薦状で推薦する方法はあるが、既に一九三五年の時点でも、東大医学部ではそのような方法は取られず、呉建を候補とする推薦状と、佐々木隆興を候補とする推薦状が、別個に送られていた（日本では、複数名の推薦が可能であることが知られていなかつた可能性も高い）。ただし、同一の機関から別個に異なる候補者が推薦されるという事態は、戦前期の日本から送られた推薦状を見る限りでは例外的である。

戦前の日本からノーベル賞受賞者が出ることはなかつたが、推薦行動から窺われる推薦者たちのこの賞への意識とその変遷を辿ることにより、戦前の日本の科学者たちの、科学觀、研究の国際的な評価に対する意識、対外意識、研究機関への所属意識、機関間の競合関係などを理解する重要な手がかりが得られると言つてよいであろう。

補章 史料紹介

以下で紹介する史料は、外務省外交史料館 I—1—3—0—7「ノーベル平和賞金関係一件」という簿冊に含まれるものである。このうち、史料一は欧亜局第一課長から宮島幹之助に宛てた手紙の下書き、史料二は宮島から東郷に宛てた手紙の写し、史料三は慶應義塾大学医学部が加藤元一をノーベル生理学・医学賞に推薦した手紙の写

し、史料四はノーベル賞の日本人受賞者を実現するための努力について書かれた公信の下書きで、公信自体は廣田弘毅外務大臣発、ストックホルム駐劄白鳥敏夫公使宛て。

史料一と二から判断すると、宮島は、一九三四年十二月十九日以前に一度東郷を訪問して面談しており、その後の経過を史料二の手紙で報告したようである。

これらの史料に登場する、宮島幹之助、東郷茂徳、吉田丹一郎、廣田弘毅、白鳥敏夫の略歴は以下の通り。

宮島幹之助（一八七一—一八八七）

東京帝大理科大学を卒業し、一九〇二年に伝染病研究所に入所。一九一四年に北里研究所創設に参画し、一九一七年慶應義塾大学医学部教授。一九二四年、郷里の山形から衆議院議員選挙に出馬し当選（ただし立候補はこの一回のみ）。一九二九年から一九三五年までは国際連盟阿片中央委員会委員を務めた。長木大三『北里柴三郎とその一門』（慶應通信、一九八九年）、一三〇—五一ページ、参照。

東郷茂徳（一八八二—一九五〇）

一九〇八年東京帝大文科大学卒業（独文学科）。一九一二年外交官及領事官試験合格。一九三三年より外務省欧米局長（翌年欧亜局と名称変更）。一九三七年、特命全権大使、ドイツ駐劄。以後、ソビエト連邦駐劄を経て、一九四一年外務大臣。一九四五年A級戦犯容疑者として逮捕される。一九四八年、判決、禁固二十年。一九五〇年米陸軍病院において死去。戦前期官僚制度研究会編・秦郁彦著『戦前期日本官僚制の制度・組織・人事』（東京大学出版会、一九八一年）、『外務省年鑑』各年版、参照。

吉田丹一郎

一八九一年生まれ。慶應義塾（理財科）を一九一五年に卒業し、翌年より外務書記生。一九一九年高等試験外交科合格。一九四四年、仏印大使府総務部長を退官。『外務省年鑑』各年版参照。

廣田弘毅（一八七八—一九四八）

一九〇五年東京帝大法科大学卒業。一九〇六年外交官及領事官試験合格。一九二三年外務省歐米局長。一九二五年特命全権公使、オランダ駐劄（翌年着仕）。ソビエト駐劄を経て、一九三三年外務大臣。一九三六年内閣總理大臣。一九四八年A級戰犯として死刑。戦前期官僚制度研究会編・秦郁彦著『戦前期日本官僚制の制度・組織・人事』（東京大学出版会、一九八一年）、『外務省年鑑』各年版、参照。

白鳥敏夫（一八八七—一九四九）

一九一三年外交官及領事官試験合格。一九一四年東京帝大法科大学卒業。一九三二年外務省情報部長。一九三三年特命全権公使、スウェーデン駐劄。一九三六年帰国。一九三八年特命全権大使、イタリア駐劄。一九四二年衆議院議員。一九四五年A級戰犯として巣鴨拘置所入所。一九四八年終身禁固刑判決。一九四九年米陸軍病院で死去。戦前期官僚制度研究会編・秦郁彦著『戦前期日本官僚制の制度・組織・人事』（東京大学出版会、一九八一年）、『外務省年鑑』各年版、参照。

(史料一・欧亜局第一課長から宮島幹之助にあてた手紙の下書き)

文書課發送昭和九年十二月拾九日發送済

主管 欧亜局長 主任 第二課長 昭和九年十二月十九日起草

欧一 半公信 昭和九年十二月十九日附

受信人名

東京都芝区白金三光町一三八番地

北里研究所

宮島〔幹之助〕博士

発信人名 吉田〔丹一郎〕欧亜局第一課長

件名 (面談申込ノ件)

拝啓陳者東郷〔茂徳〕欧亜局長宛御書面ヲ以テ
御照会越相成候未年度ノ一ベル賞本邦候
補者ノ件ニ付御面談申出度儀有之候條
御都合宜敷折當方迄御足勞相願度比段
申進度如所御座候 敬具

追而乍勝手未省ノ時日豫メ電話ニテ御通知被下候
ハ、好都合ニ奉存候

(史料二一 宮島幹之助が欧亜局長に送った手紙の写し)

謹啓

陳者過日は御多忙の際罷出で甚た御邪魔仕候其節

御話申上げたる「ノーベル」賞の件に關し昨日慶心義塾

大學医学部教授會に於て滿場一致現同大學生理學教授

醫學博士加藤元一氏を一、九三五年度生理學及醫學ノーベル賞授與候補者に推薦するに決し直ちに別紙写の通り

の推薦状を各教授より生理學及醫學ノーベル委員會宛發送仕候就てはストックホルム駐劄白鳥公使に右の旨御通報被下未年度ノーベル賞が我国學者に授与せらる、様特に御配慮方御依頼被成下度此段願上候

生理學及醫學ノーベル委員會の役員は別紙記載の通りに有之候
敬具

昭和九年十二月十九日

宮島幹之助

外務省歐亜局長東郷茂徳殿

(史料三. 慶應義塾大学医学部が加藤元一をノーベル賞に推薦した手紙の写し)

December 17, 1934.

The Nobel Committee for
Physiology and Medicine,
The Royal Caroline Medical Institute,
Stockholm.

Dear Sirs:

On the unanimous recommendation of Professors of the medical College of Keio Gijuku University, I, hereby, take the pleasure of nominating Professor Genichi Kato, Director of the Physiological Institute, Keio Gijuku University, as candidate for the Nobel Prize for physiology and medicine in 1935.

The nomination of Professor Kato is based on his recent important discoveries in the method of isolating single nerve fibers and muscle fibers to study their fundamental functions and in demonstrating the existence of the reflex excitatory fibers and reflex inhibitory fibers. The all or none law of nervous impulses is proved conclusively with single nerve fibers. These works are reported in his monograph on the Microphysiology of Nerve, a copy of which together with his earlier publications related to the problem is sent to your Committee by separate cover.

In the light of these meritorious discoveries in the field of physiology made by Professor Kato, I firmly believe that the nominee is worthy of being considered as candidate for the Nobel Prize.

Yours truly,

(史料四・スウェーデン駐劄公使にノーベル賞受賞のための運動を行うよう指示した公信の下書き)

文書課發送昭和拾年壹月四日發送済

主管歐亞局長 主任第二課長

歐二機密第六〇号 昭和九年十二月廿八日附

受信人名

在瑞典

白鳥(敏夫)公使

發信人名

廣田(弘毅)大臣

件名

千九百三十五年度ノーベル賞本邦受賞

候補者推選ニ関スル件

千九百三十五年度ノーベル醫學及生理學本邦受賞候補者推選ノ件ニ關シ今般宮嶋ヨリ慶應義塾大學醫學部ニ於テハ醫學博士加藤元一ノ生理學ニ關スル研究上ノ功績ヲ認メ全人ヲ受賞候補者トシテ推選スルニ決定セル趣別紙寫ノ通申越ノ次第アリタル處一方東京帝國大學ニ於テハ醫學博士眞

建ノ外科学ニ関スル研究上ノ功績ヲ認メ全人ヲ
本件候補者トシテ推選セル趣ニシテ此ノ間両者
ノ一同ヲ斡旋シ本邦医学界トシテ一致セル候補
者推選方尽力セル向有之タルモ遂ニ意見ノ
一致ヲ見ス両大学ニ於テハ夫々前記ノ通推選
状ヲ發送セル趣ナリ

然ル處今般ノ一ベル賞醫学生理學部委員

ヨリ本邦医学界ニ割當テラレタル候補者推選^(ママ)
権ハ從來ニ比シ頗ル多數ナル趣ニシテ本邦側ト
シテハ受賞上頗ル好機ト思考セラレ比ノ際貴官
ヨリモ可然方面ニ對スル御尽力カ望マシキ次第ナル
處叙上ノ如ク不幸ニシテ本邦医学界ニ於テ意
見ノ一致ヲ見サリシハ遺憾ニシテ貴官ニ於テ本件
御尽力相成上ニ於テモ稍々困難ハ可有之ト諒
察セラル、モ幸ニシテ何等適當ノ機會アラハ今次ハ
本邦學者中ヨリ受賞者選擇アル様可然本
件關係機關ニ御口添相成本件達成方折角
御配慮相成度比段申進ス

(別添宮嶋博士未信並全信附屬歐文書信
寫作成添付ノコト)

注

戦前期日本の医学界とノーベル生理学・医学賞

- (1) スウェーデン語では、人々のNobel賞も彼の死後は由来から賞のNobelprisの「ノーベル賞」第一節は略語にはなつてゐるが、日本語では「ノーベル賞」が正確であるが、日本では慣例は從つて「ノーベル賞」と表記する。
- (2) たゞベゼルのあらわしのがおる。Robert Marc Friedman, "Nobel Physics Prize in Perspective," *Nature*, 292 (1981), pp. 793-798; *idem.*, "Text, Context, and Quicksand: Method and Understanding in Studying the Nobel Science Prizes," *Historical Studies in the Physical and Biological Sciences*, 20 (1989), pp. 63-77; Abraham Pais, "How Einstein Got the Nobel Prize," *American Scientist*, 70 (1982), pp. 358-65; Elisabeth Crawford and Robert Marc Friedman, "The Prizes in Physics and Chemistry in the Context of Swedish Science," in Carl Gustaf Bernhard, Elisabeth Crawford, and Robert Marc Friedman, "Science, Technology and Society in the Time of Alfred Nobel" (Oxford: Pergamon Press, 1982), pp. 311-331; Michael Bliss, *The Discovery of Insulin* (Toronto: McClelland and Stewart, 1982) [翻訳『胰島素の発見』(朝日新聞社、一九八二年); Elisabeth Crawford, "German Scientists and Hitler's Vendetta against the Nobel Prizes," *Historical Studies in the Physical and Biological Sciences*, 31 (2000), pp. 37-53.]
- (3) Friedman, *op. cit.*, "Text, Context, and Quicksand."
- (4) ジャパン語をもつて、次のよひな話がある。James R. Bartholomew, "Japanese Nobel Candidates in the First Half of the Twentieth Century," *Osiris*, 2nd series, 13 (1998), pp. 238-284; 翻譯「ノーベル賞文書かひみた日本の話」一九〇一年—一九四八年：物理学賞・化学賞『科学技術史』11冊（一九九九年）, ペ71—11バーハ。翻譯「ノーベル賞文書かひみた日本の科学、一九〇一年—一九四八年：北里柴三郎から山極勝三郎まで』『科学技術史』4冊（一九〇〇年），1—6バーハ。翻譯「日本人とのノーベル物理学賞」『日本物理学年誌』五五巻七号（一九〇〇年），五〇五—五〇六—五〇七—五〇八—五〇九。
- (5) 慶應医学部、東大医学部による一九三五年の推薦につづり、時計 Bartholomew, *op. cit.*, pp. 262-279 によつても概要は述べられており、本稿に掲載する外務省外交史料館所蔵の史料を利用せよ。本稿では、日本の医学界によるノーベル賞への推薦の推移の中に一九三五年度の推薦を位置づけよう。本稿では Bartholomew, *op. cit.*, では指摘されなかつた論点を用ひかねない。すなはち、
- (6) 抽録「ノーベル賞文書からみた日本の科学、一九〇一年—一九四八年：学習の競争の科学史」『科学技術史』2冊（一九〇〇—一九年）、田舎忠。

(7)

Behring und Kitasato, "Über das Zustandekommen der Diphtherie-Immunität und der Tetanus-Immunität bei Thieren," *Deutsche Medicinische Wochenschrift*, 16 (1890), pp. 1113-1114.

(8)

北里くの堆肥にてこゝれ、*日本文獻を參照のゝる。* Bartholomew, *op. cit.*, "Japanese Nobel Candidates," pp. 243-253; *堆肥* 記載「ハーベル賞文書：北里かの堆肥」*日本一ノノノ*。

(9)

いわゆる堆肥にてこゝれ、*拙譯*、前掲「ハーベル賞文書：北里かの堆肥」を參照のゝる。

(10)

たむねば、小林栄宛野口英世書簡、明治四五年(1月)11日、丹美編『野口英世』第1卷 書簡』(講談社、一九七七年)、1

四六一-四七二。

(11) 山極・市川「上皮性腫瘍ノ発生ノ関スル実験的研究 第1報知」『東京医学雑誌』111卷(一九一九年)、1—亘118—2。

(12) Yamagiwa, "Über die künstliche Erzeugung von Teer-carcinom und -sarcom," *Virchows Archiv* 233 (1921), pp. 235-259, p. 236.

(13)

筒井秀次郎「*ホバハ人工的表皮瘤ノ就チ*」『日本病理学雑誌』2卷(一九一九年)、5111-15111-18-2。

(14)

緒方知三郎「*異友町建教授の追憶*」*疎建先生生誕百年記念公讃*、発行『疎建』(一九八一年)、111-1-11九8-2。

(15) Claude R. Hitchcock and E. T. Bell, "Studies on the Nematode Parasite, Gongylonema neoplasticum," *Journal of the National Cancer Institute*, 12 (1952), pp. 1345-1387.

(16)

Folke Henschel, "Yamagiwa's Tar-Cancer and Its Historical Significance—From Percival Pott to Katsusaburo Yamagiwa—" *GANN*, 59 (1968), pp. 447-451. 講演の回数を行なった緒方富雄が講演当夜に書いた次の文章を參照のゝる。緒方富雄「*山極先生への一言賞*」『医学のおみく』五九卷(一九六六年)、四〇九ペー。

(17)

「100人の20世纪」*山極勝三郎*『朝日新聞日曜版』一九八八年六月一日。

(18) 伝染病研究所の移管問題にてこゝは、小高健『*辰興又郎日記*』上(科学出版社カハタード、1980年)、118-117-18-2が詳しく述べて記載した。

(19)

慶應義塾における医科の設立にてこゝは、慶應義塾編集・発行『慶應義塾百年史』中巻(前)(一九六〇年)、七七七-八六〇ペーを参照した。

(20) 以レ、加藤元一の研究にてこゝは、加藤元一『*科學者の歩みの道*』(思文閣出版、一九九一年)、慶應義塾編集・発行

『慶應義塾百年史』別巻（大學編）（一九六一年），「E—111%—」，也參照した。

- (21) Genichi Kato, *The Theory of Decrementless Conduction in Narcotised Region of Nerve* (Tokyo: Nankodo, 1924). Genichi Kato, *The Microphysiology of Nerve* (Tokyo: Maruzen, 1934).
- (22) 「加藤元」への学士院賞授賞反対の公開質問状、『日本科学技術史大系』（五巻・医学）（全）五巻、第一法規、一九六七年）三八一三九ページ。
- (23) 興建については、吳建先生生誕百年記念会『興建』を参照した。
- (24) この成果は独文の書物にまとめられた。Ken Kuré, *Die vierfache Muskelinnervation: einschließlich der Pathogenese und Therapie der progressiven Muskeldystrophie* (Berlin: Urban & Schwarzenberg, 1931).
- (25) 佐々木隆興については、以下の文献を参考にした。佐々木研究所編集・発行『佐々木隆興先生論文集』（一九六五年）。同『(財)佐々木研究所付属杏雲堂病院百年史』（一九八二年）。同『財团法人佐々木研究所五十年史』（一九九〇年）。
- (26) 一九二六年にストックホルムで第一回國際生理学会が開催された際、加藤らは、実験に使用する鼈を生かしたまま運ぶために、シベリア鉄道を利用してヨーロッパへ向かった。インド洋まわりでいくと、高温高湿のインド洋の航海など、鼈にとって都合がよくないため、シベリア鉄道での旅行が選択されたのである。加藤らは、鼈を生きたままヨーロッパに運ぶために様々な努力を行なったが、途中で死ぬものもあった。このうち一匹ほどが客車の便所に捨てられたことがあつたが、これがレールを点検していた工夫の鼻先に落ち、怒った工夫が列車を出さないと怒鳴り込んでいたことがあつた。ほかにも、革命後のソ連の旅行には数多くの困難があつたようである。
- (27) 白鳥敏夫『國際日本の地位』（笠置書房、一九三八年）は、日本の国際的地位を向上させるための外交政策を論じた本であるが、この中に「ボーア教授歓迎の辞」という章があり、一九三七年にボーアが来日した際、白鳥が歓迎会に招かれて祝辭を述べていたことがわかる。
- (28) 『科学知識』（五巻）一号（一九三五年一月）、（五巻）十一号（一九三五年一一月）。